認知から見た形容詞述語文の時間表現
― 継続性表現の分析 ―

遠藤藍子

Semantic Analysis of Adjectives for the Expression of Temporal Relations

Ranko Endo

Adjectival sentences with terms of time span could indicate continuity. This paper aims at demonstrating that aspect is the internal temporal continuity of the situations based on the definition given by B.Comrie (1976) and this function is observed even in adjectives. The fact that not all adjectives indicate continuity in terms of time suggests that there are some semantically defferent types among adjectives. Endo (1995) claims that cognition is a key word to full understanding of expressions with adjectives, and shows that the adjectives can be classified into three types by their cognitive process. This study proves that these three types of adjectives can also explain the difference in characteristics of aspect of adjectives and interpretations of adjectival sentences with terms of time span.

【キーワード】認知　認知過程　認知の型　継続性　持続性　繰り返し　トキ　時間幅

1. はじめに
1.1　研究概要

形容詞述語文は、文中に時間幅を示す語句があると継続性を表す。が、形容詞の種類により継続性が表わせない、あるいは表す継続性の内容が異なるという事実が指摘される。本研究は、形容詞述語文が表すこうした継続性を、形容詞のアスペクトと捉える立場に立つものである。筆者は、形容詞の特性は認知にあると見て、その認知の過程の在り方の分析から、形容詞は３つの型に分けられることを既に主張しているが (遠藤1995)、本論文では、その３つの型が形容詞の種類と継続性表

現との関係を説明するのにも有効であることが明らかになった。

1.2　研究目的

同じ形容詞を使った文でも、文中の要素により、その形容詞で表される時間の長さがかなり違うことを感じることがある。

(1) a　えっ、もう寝るの？早いね
　　b　父はこのごろ寝るのが早い
(2) a　あっ、切っちゃった。痛い！
　　b　夕べから頭が痛い
(3) a　あっ、逃げられた！惜しいなあ
　　b＊先日ね、せっかく釣った魚を逃がしたんだ。それ以来、惜しいんだ

(1a) ～ (3a) は発話の時点の状況を点的に描写していると取れるが、(1b) (2b)は対象となる時間がもっと幅を持っているように思われる。本論文では、これを形容詞述語文が表す「継続性」と捉える。継続性を表出させているのは文中にある時間幅を示す語句（波線）であろう。しかし (3b) は時間幅表示句（波線）があっても継続性が表れず、非文となる。一方 (1b) は早イと思うことは1日に1回であってもそれがある日数続けば継続しているととれるのであるが、(2b) の痛イという感覚は途切れることなく一定時間継続しているととれ、両者の継続の在り方には違いが見られる。こうした現象はどう説明すればよいのであろうか。この疑問を解明することが本研究の目的である。

1.3　研究対象

本論文では、辞書形の語末が「ーい」で終わる形容詞、いわゆる「イ形容詞」を対象に、その述語文が表す「継続性」の特徴を分析していく。同じ形容詞でも「ナ形容詞」は含めない。一般に両形容詞は意味機能が共通するところから同列に扱われることが多いが(注1)、両者は語構成の面で異質な要素を持つ(注2)とみられるので、分けて扱われるべきだと考えるからである。従って、以後単に「形容詞」とあればイ形容詞を指す。

形容詞の形としては、終止形の断定用法のーイ（イ形）・ーカッタ（タ形）の2形を

扱う。本論文でいう「形容詞述語文」はイ形かタ形を文末におく形容詞文を指す。

2.　形容詞述語文にみる継続性表現

ここでは形容詞述語文が継続性を表す場合を具体的に見て行く。

実例の検討に入る前に、本論文では「トキ」という語を、時間の流れの全ての領域、いわゆる現在・過去・未来のどれをも包含する概念語として用いることを予めお断りしておく。

「継続」というのは、一定の時間その事象が続くことを意味するので、必然的にその時間が設定されるトキとの関係が出てくる。継続性の表出とトキとの関係の在り方として、次の３つのケースが考えられる。

(4)　1　継続の時間が隣接する２つのトキにまたがっている場合
　　a　過去から現在にかかるトキの場合……＜ケース1＞
　　b　現在から未来にかかかるトキの場合……＜ケース2＞
　　2　継続の時間が過去・現在・未来の各範囲内にある場合……＜ケース3＞

そこで本章では、2.1で＜ケース1＞、2.2で＜ケース2＞、2.3で＜ケース3＞の事例を見ていく。

2.1　＜ケース１＞ 過去から現在にかかるトキの継続性表現

形容詞述語文におけるイ形とタ形の対立の基本は、現在か過去かというテンスの対立である。

① (5)　A　：どうしたの？　風邪でもひいたの？
　　B　：そうらしい。ああ、のどが痛いなあ／　＊痛かったなあ
　(6)　A　：そんなに悩んでないで、思い切って会社を辞めてしまえば？
　　B　：でも、今は辞めたくない気持の方が強いんだ／　＊強かったんだ
　(7)　A　：肩を揉みましょうか？
　　B　：え、どうしたの。　今日はやけに優しいね／　＊優しかったね
② (8)　A　：その歯、そうとう痛そうだね。いつから？
　　B　：夕べから　痛かったの／　痛いの

(9) 小宮：伊達さん、いま、23歳ですよね。ずっとテニスを続けていこうと思ってます？

伊達：いやぁ、思っていないですね。私、ちっちゃい時から結婚願望が強かったんですよ（週間朝日 1994.10.23「小宮悦子のおしゃべりな時間」）／　強いんですよ

(10) A：お母様は軍人の御令嬢だから、厳しい方だったのではありませんか。

B：いいえ、母は昔から　優しかったですよ／優しいですよ

①の場合、文中に発話時を示す語（波線）があるので、各々のイ形は確かに発話時（現在）の感覚や評価を表しており、これはタ形には言い換えられない。しかし②のタ形は発話時以前（過去）の感覚や評価の表現だとは単純には言えない。なぜならイ形との入れ替えも可能で、イ形とタ形が並立するからである。

②では、なぜこのようなイ形とタ形の並立が可能なのであろうか。この答えの鍵は、文中の「～から」という過去の始点表示句（波線）にあろう。この語があるので、②の文はいずれも過去のある時点から発話時点まで、当該形容詞で表される感覚や評価が「継続」していると読める。

では、その「継続」の内容をもう少し詳しく見てみる。

まず (9) (10) では、強イ・優シイと自覚する機会がこれまでに繰り返してあったことを意味していると考えられる。(8) の痛イも同様の内容を表すとも言えようが、痛イという感覚が途切れることなく続いているとも見られ、むしろそう見る方が自然だと思われる。(9) (10) には、その読みはできない。

ところが、形容詞によっては文中に過去の始点表示句があっても、継続性を表さない場合がある。例えば次の (11) の惜シイで、これは時間幅表示句（波線）が文中にあると、イ形であれタ形であれ非文になる。

(11)　彼女が退職したのは、当時からずっと＊惜しい／＊惜しかった

このことは、形容詞述語文が継続性を表すか否かには、形容詞自体の性質も関係していることを示している。

では、②の文のテンスは現在、過去、どちらなのであろうか。ここでは形容詞の

例をいくつかあげたが、実はこのような２つの活用形態が併用される現象は、形容詞に限らず、広く状態性述語(注3)に共通してみられることで、いわゆるル形とタ形が並立する事例が諸氏(注4)によって数多く指摘されている。それらの研究に共通するのは次の２点である。

(12)　1　ル形とタ形の並立表現が可能になるのは、対象となる事態が、過去と現在との境界があいまいになる時点、つまり発話の時点とも発話の直前ともとれる場合、あるいは過去から現在が連続しているような場合である。

2　ル形とタ形のどちらで表現するかを決めるのは、話者の事実の捉え方であり、そこに話者の視点や心理が反映される。

本論文でも②のタイプの形容詞述語文のイ形とタ形の並立については、(12) と同じ見方をとるものである(注5)。

以上、述べてきたことのうち、形容詞述語文の継続性表現に関する点をまとめると、次のようになる。

(13)　形容詞述語文が、過去から現在にわたるトキにおいて継続性を表す場合には、(a) 過去の始点表示句（カラ）が含まれる、(b) その形容詞が継続性を表す性質を持っている、という２つの条件が備わっている。また、その継続性の内容は、形容詞によって「持続表現」か「繰り返し表現」かに分かれる。

2.2　＜ケース2＞ 現在から未来のトキにかかる継続性表現

高橋 (1986) は、形容詞述語文のイ形は、未来を表す状況語や条件が示されると未来を表し得ると述べている。実際、次の (14) の早イはイ形であるが、「あしたは」という未来表示の語があるので、現在ではなく未来を表現している。

(14)　あしたは出発が　早い／　＊早いだろう。　もう寝るよ。

しかし、未来表示の語があるだけでは、未来テンス表現とするのに十分ではない。

(15)　あしたはバーゲン初日だから、お客の出足は　＊早い／　早いだろう

(16)　あしたは5時の出発だから、私は　＊眠い／　眠いだろう

(15) も (16) も「あしたは」の語があるが、イ形はとれず、ダロウのような推量を表す語をつけないと非文になる。が、逆に (14) はダロウをつけると不自然になる。

この違いを生む理由、すなわち形容詞のイ形が未来テンスを表すための条件は、未来に確実にその状況が生起するか、つまり話者自身がその状況を確信できるか否かによると思われる。例えば (14) では話者は「もう寝るよ」と言っているので、話者が「あしたは出発が早い」ことを確信していると読める。だからこそ推量表現のダロウがとれないのである。これに対し、(15) では「あしたのお客の出足」が実際に早いか否かはお客任せで不確かであり、(16) も眠イのような感覚は自然発生的なものであるから、未来に必ず発生するか否かは話者当人にも保証できない不確実なものである。したがって、話者はダロウを付けざるを得ないのである。このことから、未来テンスを表すには、話者が発話時点以降にその事象が生起すると確信していることが文脈から保証されなければならないことがわかる。

しかし、次の (17) の惜シイはイ形・ダロウのどちらの形でも非文になる。

(17)　あしたは横綱の全勝のストップが　＊惜しい／　＊惜しいだろう

このことから、形容詞の中には未来テンス表現ができないものがあることが知られる。

ところで、次の (18) と (19) のイ形もダロウ（デショウ）をつけると非文になるので、未来テンス表現であるが、これらは未来における終点表示句（波線）があるので、ともに未来における継続表現になっている。

(18)　A ：　やだなあ、なんだか心臓がドキドキしている。
　　B ：　大丈夫だよ。面接はうまくいったんだから、絶対受かるよ。
　　A ：　でも、内定の知らせを受けとるまでは、怖いわ／＊怖いでしょう

(19) 早朝レッスンがあるので、来月末まで出勤時間が　早い／＊早いだろう

しかし (18) と (19) で継続性の内容には違いが見られる。(18) は怖イという気持ちが発話時点（現在）から内定の知らせを受けとる時点（未来）まで休みなく続くことを示しているのに対し、(19) は今から来月までは出勤時間が早いと言ってい

るのであるから、繰り返すことによって表される継続表現となっている。

以上取り上げてきた未来テンス表現のうち、継続性を表す場合については、次のようにまとめることができる。

(20) 形容詞述語文が、現在から未来にわたるトキにおいて継続性を表す場合には、(a) 未来終点表示句（マデ）が含まれる、(b)その形容詞が継続性を表す性質を持っている、(c) 未来におけるその形容詞が表す内容の発生を話者が確信していることが読める文脈がある、という3つの条件が備わっている。また、その継続性の内容は、形容詞によって「持続表現」か「繰り返し表現」かに分かれる。

2.3　＜ケース3＞ トキの各時間域内における継続性表現

高橋 (1986) は、次の例のように形容詞文に「時間を限る状況語」（波線ー筆者注）があると、イ形もタ形も現在または過去における、より広い時間幅の状態や特性の表現になると述べている。時間を限る状況語は「時間幅を示す語」とも換言できよう。

(21) どうも近ごろは（中略）気にいった色がすくないわねえ（高橋の例44）
(22) あのころは田代さんもわかかったなあ（高橋の例74）
(23) 結婚準備で、来月いっぱいは忙しいよ

これらの例が表すトキは、(21) は「近ごろは」とあり広義の現在、(22) は「あのころは」で過去、(23) は「来月いっぱい」とあり未来である。そして(21)は「気に入った色が少ない」と思うことが、(22) は「若い」と思うことが、(23)は「忙しい」と思うことが、それぞれのトキに繰り返されたという内容を表している。

次の (24) も (21) と同じ「近ごろは」という語を含むのであるが、継続性の内容は違っていて、痛イと感じる状態が連続していることを表している。

(24)　持病のリウマチで、近ごろは寝ても覚めても足が痛い

また一方、次の例のコトのテンス(注6)は、(25) が現在、(26) は過去、(27) は未来で、各々トキを区切る語（波線）を備えているが、継続性を表すどころか、文その

ものが成り立たない。

(25) ＊近ごろ、あの議員の主張は筋が通って　正しい
(26) ＊国会の会期中、あの議員の主張は筋が通って　正しかった
(27) ＊今年度いっぱい、あの議員の主張は筋が通って　正しい

これは、正シイには元来継続性を表す性質が備わっていないためだと思われる。

以上、本節で述べてきたことをまとめると、次のようになる。

(28) 形容詞述語文が、あるトキの範囲内で継続性を表すことができる場合には、(a)トキの範囲内の時間幅を示す語が含まれる、(b) その形容詞が継続性を表す性質を持っている、という2つの条件が備わっている。また、その継続性の内容は、形容詞によって、「持続表現」か「繰り返し表現」かに分かれる。

2章では、時間幅を示す語のおかれるトキを3つのケースに分けて、形容詞述語文が継続性を表現する場合の条件や状況を見てきたが、それらに共通する特徴として次の点を指摘することができる。

(29) 形容詞述語文が継続性を表現するには、(a) 時間の幅を示す語を含み、(b) その形容詞が継続性を表す性質を持つものであることが条件となっている。また、表される継続性の内容は、形容詞によって (c) 持続表現か、(d) 繰り返しの表現かに分かれる。

この (29) から、形容詞の持続表現には形容詞の持つ性質が深く関わっていることがわかり、継続表現の可否を説明するために形容詞の分類の必要性が出て来た。

次章でその点を究明していく。

3.　形容詞述語文の継続性表現の特徴

前章で指摘したように、形容詞述語文の継続性表現には形容詞の性質が関係していると見られることから、形容詞の種類の検討が求められることとなった。そこで本章では、まず3.1で形容詞が継続性を表すことの意味を明らかにし、次いで3.2で形容詞の分類を試み、さらに3.3でその分類と継続性表現の関係を見ていく。

3.1　形容詞述語文の継続性表現の位置付け

本節では、諸言語における時間表現の研究を行っているComrie (1976) の考え方を確認したあと、その考えを基に形容詞の表す継続性の問題を考える。

今日、日本語のアスペクトの研究は、対象が動詞であることを前提に、その形態論的対立形式の意味と用法の分析を中心に行われている。しかし、Comrie (1976) はアスペクトの分析の対象を動詞には限定せず、また文法形式の有無には重点をおかず、意味上の区別立て (semantic distinction) を基に、言語の中に見られるアスペクトの現象を広く取り上げている。彼はテンスと対比させながら、次の点を指摘している。

(30)　1　テンスとは、さしだされた場面 (situation) の時間の、別の時間、普通は発話の瞬間 (moment) への関係づけ (time reference) であるのに対し、アスペクトは、場面の内的な時間構成を捉える様々な仕方である。

2　テンスが「場面の外的な時間 (situation-external time)」だとすれば、アスペクトは「場面の内的な時間 (situation-internal time)」にあたる。

3　テンスとアスペクトは、共に意味論的カテゴリーとして捉えられるが、ある言語にテンスがあるという場合は、その言語は別な時間への関係づけ (time reference) を表すための文法的なカテゴリーが備わっていることを意味するが、アスペクトの場合は、その意味的区別が文法化されている例ばかりではない。

こうしたComrie流の考え方は、奥田靖雄 (1978) のようにアスペクトを形態論的カテゴリーと捉え、対象は動詞、しかもスルとシテイルの対立を持つものに限定する見方をいったん離れ、形容詞にもアスペクトを捉える余地を与える。そこで本論文は次の (31) に示された立場から、以下の考察を進めていくことにする。

(31)　形態面では同一であっても、構成要素や文脈によって、その形容詞述語文に「場面の内的な時間構成」の差異が読み取れる場合には、それを形

容詞のアスペクト表現として取り扱う。

このような立場に立てば、これまで見てきた形容詞述語文の継続性表現も、その場面で形容詞述語が表す時間の在り方を、いわば形容詞の内面から問題にしているのであるから、アスペクトの問題と見ることができる。また、継続性表現の可否や在り方が形容詞により異なるという事実は、形容詞の語彙的アスペクトの存在を示唆している。

なお、本論文では継続性と持続性という用語を次のように区別して扱いたい。

(32) 1　ある場面が一定期間続くのであれば、続き方が連続的 (durative) なものであれ、反復的・習慣的 (habitual) ものであれ、「継続性」として扱う(注7)。

2　「持続性」は、あることが途切れなく連続して続くことを表す意味で用いる。

本節では、形容詞の継続性をアスペクト現象と捉えて考察していく立場を確認した。以下では、継続性アスペクトを表せる形容詞とはどのような種類なのかを検討する。

3. 2　認知の過程から見た形容詞の型分類

どのような種類の形容詞が継続性のアスペクトを担うのであろうか。本節では、その問いに答え得ると思われる形容詞の分類を扱う。

現代日本語の形容詞の特徴の最も一般的な捉え方は、その形容詞がモノゴトの性質や状態を表すか、人間の感覚や感情を表すかという面からのアプローチであろう。実際、形容詞はそうした意味を基に通常「属性形容詞」と「感覚・感情形容詞」の２つに大別されるが(注8)、この分類は統語や用法上の違いを伴う特徴づけともなっている(注9)。しかし、これまで取り上げた形容詞のうち、例えば継続表現が可能な痛イ・強イ・優シイと、不可能な惜シイについて見てみると、痛イは感覚・感情形容詞だが、他は全て属性形容詞となり、この２分類では継続表現の可否を説明することはできないとわかる。

では形容詞が形容詞であることの基本的特徴とは何なのであろうか。森田 (1968)

は形容詞を動詞と比較し、両者の根本的な相違を次のように指摘している。

(33) 1　形容詞は、対象に対する話し手の主観的な認知・判断による言表である

2　動詞は、対照たる素材の変化する属性に対して、客観的に判断した叙述・描写である　(p.6　波線ー筆者)

本論文も、(33-1) に提示された「主観性」「判断」「認知」を形容詞を特徴づけるキーワードだと見るものである。とりわけ「主観性」は動詞の客観性との対比で抽出される、形容詞全体に関わる特徴であろう。また「判断」については「判断・評価」と言い換えてもよいであろう。が、「認知」については、森田 (1968) のように「直接感情を志向ないし吐露したもの」(p.2) というようには限定せず、「判断・評価」の活動をも包含する意味に捉える必要があると考える。なぜなら、例えば「足が痒い！」と直接的な感覚を述べた場合でも、「足が大きいね！」という判断を述べた場合でも、各々の現象を捉える際に話者に働く作用は同じであり、その作用こそが認知であると見るからである。したがって、この認知という作用も主観性と同様、形容詞全体を特徴づけるものであり、また形容詞表現の根本に関わるものと捉える。

以上をまとめると、次のようになる。

(34) 本論文では、「認知」は話者がモノゴトを捉える作用全体を意味し、その「認知」の在り方が形容詞表現を最も特徴づけるものだと見る。また認知の内容は話者により異なることから、形容詞表現には「主観性」や「判断・評価」という特徴も備わっているのだと考える。

このように、形容詞表現がモノゴトに対する話者の認知の表現であるならば、その認知作用には、モノゴトをどんな経路とタイミングで認知するか、換言すれば、時間概念を伴う「認知の過程」というものを想定することができよう。

筆者は遠藤 (1995) で、形容詞述語文におけるイ形・タ形の併存現象を説明し得る視点軸として、「認知の過程」に着目し、そこから形容詞を 3 つの型に分類することを試みた。以下ではその認知の型分類が、継続性表現の可否も説明し得るかを検討していくが、それに先立ち、その形容詞分類自体の紹介をしておきたい。

（詳しくは遠藤 1995 参照）

認知の過程から眺めると、形容詞は次のI・II・IIIの3型に分類できる(注10)。

(35) 認知過程からみた形容詞の型分類

I型… モノやコトから感覚的、生理的、感情的に受けた刺激をそのまま瞬間的に表現する「刺激直結型」

例　ヤカンに触って「熱い」と言ったり、徹夜明けに「ああ、眠い」と言うような場合

II型… モノやコトから単独ないし複合的に受けた刺激に判断・評価を加え、ほぼ瞬間的なタイミングで表現する「刺激＋判断・評価」型

例　生まれたばかりの赤ん坊を見て「色が白い」と言ったり、食べ物をじっくり噛んで「おいしい」と言うような場合

III型… 直接の刺激は問わず、コトの生起後、そのコトに対する総合的な判断・評価を表現する「思考」型

例　経営の行き詰まりを見て「あの会社は危ない」と言ったり、合格を知らされて「それはよかった」と言うような場合

ところで、この形容詞の3つの型は、事象の発生から発話に至るまでの経路が異なるところから、発話までに要する物理的な時間に差があると考えられる。すなわち、I型、II型、III型の順で発話までの所要時間は長くなるとみてよい。もっとも、I型とII型の差は単なる観念上の違いで、実質的にはII型もI型同様、瞬間的に認知される場合が多いとみられるが、III型は実質的にも発話までに時間をおくと考えられる。では、なぜ所要時間の上からはほとんど差がないとみられるI型とII型を敢えて別の型として区別したかというと、認知の経路の違いもあるが、もう1つには、I型とII型ではその認知の性質にも相違があるからである。I型の認知は、刺激に対して受け身的であり、刺激が続く限り認知も継続する。熱イだったら、ヤカンから手を放さない限り「熱い」という認知は続くし、「眠い」という認知も自分ではどうにも止められないものである。これに対しII型とIII型の認知は継続性

はもたない。これは両型とも判断や評価という精神活動が持つ一回生起という性格の影響の下にあるからとみてよかろう。ただ、II 型については、例えば白イなら「あの人は子供の時から色が白い」、オイシイなら「あの人の作る料理は昔からおいしかった」というように、反復的な認知による継続性は表し得る。だが、III 型の認知はそうした反復的な継続性も表し得ない。II 型とIII 型がこの点で異なるのは、II 型の認知は一回生起の判断・評価の過程を経るとは言え、五官等からの刺激を基にしているところから、認知が反復的に生起する可能性があるためと思われる。

以上をまとめると (36) の表のようになる。

(36)　形容詞の認知の型の特徴

	I　型	II　型	III　型
認知経路 ↓	事象 (刺激) ⋮ 認知	事象 (刺激) (判断・評価) 認知	事象 ⋮ (判断・評価) 認知
タイミング	瞬間的	ほぼ瞬間的	非瞬間的
特徴	刺激直結 モノ・コト対象	刺激＋判断・評価 モノ・コト対象	思考中心 コト対象
継続性	持続による継続性	繰り返しによる継続性	非継続性
語例	熱い・眠い	白い・おいしい	危ない・いい

本節では、認知過程の在り方から形容詞は 3 つに分類することができることを示し、その型が継続性に関しどのような特徴を持つかについて考察した。

次節では、その型から形容詞述語文における継続性の表れ方の特徴を整理する。

3. 3　形容詞の型から見た継続性表現の特徴

2 章で形容詞述語文の継続性表現を3 つのケースに分けて取り上げた。本節では各ケースで継続性を表している形容詞の認知の型を確認し、その特徴を抽出する。

＜その1＞ 過去から現在にかかるトキの継続性表現（＝2.1）

ここであげた事例のうち継続性を表すのは (8) 痛イ・(9) 強イ・(10) 優シイである。認知の型は、痛イはズキズキといった刺激を直結表現したI型であり、その認知が持続することを表している。強イ・優シイは何かへの実感を基に評価を行なっているII型で、そう思うことをこれまで何度も繰り返したことを表している。因みに継続性を表さない (11) 惜シイは事態を事後に評価するIII型である。

＜その2＞ 現在から未来にかかるトキの継続性表現（＝2.2）

ここでの例のうち継続性を表すのは (18) 怖イと (19) 早イで、どちらの例も現在から未来のある時点まで各形容詞のその認知が継続するという話者の確信が表れている。認知の型は、怖イは心臓が早打つといった刺激をそのまま表したI型で、持続型だが、早イは早朝レッスンの予定を聞いて判断したII型で、その認知が繰り返すと見ている。

＜その3＞トキの各時間内における継続性表現（＝2.3）

ここでは (21) 少ナイ (22) 若カッタ (23) 忙シイ (24) 痛イの例が継続性を表わす。認知の型は少ナイ・若イ・忙シイは実感または実感予測して評価したII型で、その間何度もそう思うことがあったという繰り返しを表しているが、痛イは実感をそのまま表わしたI型で、その認知感覚が途切れのなく続くことを表している。

以上から、形容詞の認知の型から見た形容詞述語文の継続性表現の特徴は次のようにまとめられる。

(37) 形容詞述語文が (a) 過去から現在、現在から未来ように隣接する2つのトキにまたがる領域、あるいは (b) 現在・過去・未来のいずれかの範囲内において、時間幅を示す語を伴う場合に、継続性のアスペクトが表される。ただし、未来の継続表現については、話者がその認知の継続を確信していると読める文脈があることが要件である。継続性を表せる形容詞はI型かII型に限られ、III型は　継続性を表せない。ただIとIIでは表わす継続性の内容が異なり、I型では認知が持続することを、II型では認知が繰り返すことを表す。

本節では、形容詞の継続性アスペクトの表出に形容詞の認知の型が深く関わって

いることを明らかにした。

4. まとめ

これまで検討してきたことを総合すると、次のようになる。

形容詞の継続性アスペクトは、文中に時間幅の表示があることで表出する。本論文では、形態的な違いは無くとも場面の内的な時間構成に差異があればアスペクトとして見ていくというComrie (1976) と同じ立場に立ち、形容詞述語文に表れた継続性もアスペクト表現であると捉えるものである。さらに、形容詞表現の最大の特徴は話者の認知の表現であると見、その認知の過程を視点軸に据えることにより、各形容詞をI・II・IIIの3型に分類できることを提示した。

各形容詞の型は、認知過程の違いから表れる性格も異なる。すなわち (a)「刺激直結」のI型は、刺激が続く限り認知も存続するので「持続性」を基にした継続性アスペクトが表せる。これはI型形容詞の語彙的アスペクトと捉え得る。(b)「刺激＋判断・評価」のII型は、判断・評価という個別的な精神的行為を含むので持続性は表せないが、「繰り返し」の解釈が可能な文脈において継続性アスペクトが表せる。(c) コトを事後に総合的に判断・評価をする「思考型」のIII型は、本質的に一回生起の表現であるところから、継続性アスペクトを表すことはできない。したがって、形容詞述語文が継続性アスペクトを表すには、文中に時間幅の表示があることだけでなく、形容詞自体がもつ認知上の特質もその決め手となること、およびその特質が継続性の種類にも関わることが明らかになった。

以上、本論文では形容詞述語文の継続性表現の特徴の分析を試みたわけであるが、最後にもう一言つけ加えておきたい。

認知過程の特性によって表れる継続性アスペクトは、イ形とタ形が並立する表現や未来表現の可否を巡りテンスとも関わっているという現象が指摘されたが、それを通し、形容詞の認知の在り方は継続性アスペクトの在り方を左右し、そのアスペクトの在り方はテンスの表れ方を左右するという、認知・テンス・アスペクトの三者は相互に影響し合う関係にあるという点が改めて確認された。

言語科学研究第2号(1996年)

＜注＞

1) 例えば、日本語教育事典 (1982)・三上 (1972)・高橋 (1986)など。
2) イ形容詞とナ形容詞では語末に付くデスの語構成上の役割が異なる点。
3) 高橋 (1983)は動的動詞の例も加えているが、本論文では別に扱うべきだと考える。
4) 寺村 (1984)・三上 (1972)・牟世鍾 (1993)・高橋 (1986) など。
5) イ形とタ形の併用には時間幅を示す語を伴わないタイプのものもあるが、その場合のイ形・タ形併用可能な理由は異なっていると考える。（遠藤 1995 参照）
6) コトのテンスと断ったのは、(26) の正シカッタ（タ形）は、テンス表現（過去）ではなく、パーフェクトの表現だと考えるからである。（遠藤 1995 参照）
7) ここでの「継続性」は Comrie (1976) の言うdurative（持続相）と habitual（習慣相）を共に含むものとして扱っている。
8) この分類方法には歴史的な経由も絡むと言う（山本 1955 参照）
9) 西尾 (1972) 参照。
10) この分類はどの形容詞にもあてはまると考える。ただ、形容詞により派生的意味が生じていて、複数の型に属する場合もあり得る。

＜参考文献＞

日本語教育学会編　(1987)『日本語教育事典』縮刷版　大修館書店
遠藤藍子　(1995)「形容詞述語文のテンス表現の分析」『言語変容に関する体系的研究及びその日本語教育への応用』平成六年度科学研究補助金　研究報告書　所収
奥田靖雄　(1978)「アスペクトの研究をめぐって－金田一的段階－」松本泰文編『日本語研究の方法』所収　むぎ書房
高橋太郎　(1983)「スルともシタともいえるとき」『金田一春彦博士古希記念論文集第 1 巻国語学編』所収　三省堂
高橋太郎　(1986)「形容詞のテンスについて」　宮地裕編『論集日本語研究 (1) 現代編』所収　明治書院
寺村秀夫　(1984)『日本語のシンタクスと意味II』　くろしお出版
西尾寅弥　(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』　国立国語研究所報告 44　秀英出版
三上　章　(1972)『現代語法序説－シンタクスの試み－』　くろしお出版
牟　世鍾　(1993)「発見・思い出しにおける『ル』形と『タ』形」　日本語学 Vol. 12-2 明治書院
森田良行　(1968)「動作・状態を表すいい方」『講座日本語教育』第4分冊　早稲田大学語学教育研究所
山本俊英　(1955)「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」国語学 23　国語学会
Comrie, Bernard (1976) *Aspect.* Cambridge University Press, Cambridge
（山田小枝『アスペクト』1988　むぎ書房　参照）

認知から見た形容詞述語文の時間表現

＜付記＞ 本論文は1995年1月神田外語大学大学院言語科学研究科に提出した修士論文「認知からみた形容詞述語文の時間表現－イ形とタ形の使い分けを中心に－」の一部に加筆修正を施したものである。直接ご指導下さった徳永美暁助教授をはじめ、ご教示を賜った方々に記して謝意を表する。